

# GLOBE

<https://www.intcul.tohoku.ac.jp>



国際文化研究科 広報

No.38

Oct 2025

## Contents

- 02 研究科長メッセージ
- 03 30周年記念式典の報告
- 04 研究プロジェクト  
オリオン・クラウタウ 准教授  
大河原知樹 教授
- 06 新任教員紹介  
常本 亜希 准教授  
中津 匡哉 講師
- 07 受賞報告
- 08 退職教員からの言葉  
上原 聰 教授
- 08 新刊紹介
- 09 修了者からのメッセージ  
阿部 純さん  
グエン・ティー・テウー・フエンさん
- 10 科研費採択報告
- 12 INFORMATION
  - キャリア講習会
  - 公開講座
  - 入試説明会
  - 入試日程



# 研究科長メッセージ



## 国際文化研究科長 刘 庭秀

国際文化研究科は、価値観の多様化、国際情勢の複雑化、深刻な環境問題など、地域から地球規模に至る課題に対応し、持続可能な社会の構築を目指して、分野横断的な研究・教育・社会貢献を展開しています。世界各国の社会、経済、歴史、文化、科学技術、環境、制度・政策などを対象に、文化・社会・言語に関する幅広いテーマを国際的かつ学際的な視点から研究し、その成果を学生指導に還元するのみならず、世界トップレベルの研究成果に基づく新たな学問領域の創出、産学官連携の推進、地方創生への貢献にも取り組んでいます。

本研究科は、1993年の創立以来、国際的な地域文化、文化交流、言語文化に関する学際的かつ総合的な教育・研究を行ってきました。そして、「地域文化研究」「グローバル共生社会研究」「言語総合研究」の三分野で構成され、「グローバルガバナンスと持続可能な開発プログラム(G2SD)」「言語総合科学コース(IGPLS)」の2つの英語プログラムとともに、国際化の進展に対応し、国内外で活躍し国際貢献を担う優れた人材の育成に努めています。

昨年12月には、コロナ禍の影響で1年遅れとなった「国際文化研究科創立30周年記念式典」が開催され、創立に関わった先生方をはじめ、学内外の関係者、国内外で活躍する修了生が一堂に会し、「国際文化研究」の可能性と潜在力を再確認する貴重な機会となりました。

皆さんもご存じのように、東北大学は昨年11月、国の新制度である「国際卓越研究大学」に第1号として認定され、12月には「研究等体制強化計画」が正式に認可されました。本学は、「Impact(未来を変革する社会価値の創造)」「Talent(多彩な才能を開花させ未来を拓く)」「Change(変革と挑戦を加速するガバナンス)」の3つの柱のもと、世界の研究者を惹きつける研究環境と全方位の国際化を推進していきます。これを受け、国際文化研究科も「国際卓越研究大学」にふさわしい世界トップレベルの研究成果の発信、優れた教育体制構築、民間企業との共同研究の推進が求められており、既存の研究・教育成果を超えるパフォーマンスの実現が必要です。今後、教職員・学生・修了生のコミュニティーをさらに強化し、研究科のプレゼンス向上に努めてまいります。

本研究科では今年度より、国内外から多様な分野の「国際卓越研究者」を採用し、研究科教員との連携はもちろん、世界各国の研究機関との国際共同研究を展開しています。社会課題や産業界のニーズを的確に把握し、国内外の民間企業からの受託研究の受け入れも拡大しており、これらの研究・教育・社会貢献の成果を積極的に発信していきます。

「総合文系」に分類される本研究科には、人文社会系・理工系の研究者が在籍し、それぞれの専門性を活かしながら分野横断・文理融合の学際研究を推進していますが、西棟の改修に伴い、国際交流室、産学連携共同研究室、産学連携実験室、地域連携室、言語科学実験室などを整備し、社会の多様なニーズに応える研究・教育体制を構築するための基盤ができました。

本研究科は約8割が留学生で構成されており、外国人教員や女性教員も多く、多様な文化・言語・価値観を体験できる環境が整っています。近年では、教員・学生による研究論文がQ1やCite Score Top 10%ジャーナルに掲載される事例が増加しており、学術賞の受賞、民間企業との受託・共同研究も拡大しています。これは研究科構成員の研究力向上の証であり、今後もより充実した研究支援体制の構築に向けて、さらなる努力を重ねてまいります。

# 研究科創立30周年記念式典の報告

研究科創立30周年記念式典は、富永悌二総長はじめ、理事・副学長、各部局長、また産学連携パートナー企業よりのご来賓、本研究科の名誉教授、退職教員、修了生、そして現役の教職員・学生の皆さま多数にご参会をいただきました。

記念式典は富永総長よりのご祝辞のあと、過去の3代にわたる前研究科長（小林文生先生、黒田卓先生、小野尚之先生）により、それぞれの在職時代の想い出と研究科への期待を込めたビデオメッセージをいただきました。それに続いて、30周年記念に作成した研究科プロモーションビデオ「グローバル社会へ向けての人材育成」が披露されました。これは、現在研究科に所属する3名の学生（一木優花さん、程鑫さん、Victoria Anne Floodさん）に本研究科を選んだ理由、研究の内容、将来の抱負について語っていただき、素晴らしい映像とともに作成した研究科紹介ビデオです。

記念行事の部では、末吉竹二郎先生（国連環境計画・金融イニシ

アチブ特別顧問）による特別記念講演「日本のGX（Green Transformation）を考える」、そして、3名の本研究科修了生、高橋洋先生（近畿大学）、戸敷浩介先生（宮崎大学）、吳蘭先生（山形大学）による「国際文化研究科と私：過去・現在・未来」と題した修了生記念トークが行われました。最後に、世界中で活躍している本研究科の同窓生の中から、今野彩さん、三木良子さん、金廷珉さんの3名よりいただいた心温まるビデオメッセージを披露しました。

本式典は盛会のうちに無事終了することができましたが、ご来臨を賜りましたご来賓の方々、ご参会くださった皆さまをはじめ、本式典の企画、実行に携わってくださった関係者の皆さま各位に心より御礼申し上げます。なお、研究科プロモーションビデオ、記念式典・記念行事のライブ配信は本研究科ウェブサイトからご視聴になりますので、御覧いただけますと幸いです。（江藤裕之）

東北大大学院  
国際文化研究科  
創立30周年記念式典

国際文化研究科は1993(平成5)年4月に創設され、2023年(令和5)年4月をもちまして  
創立30周年を迎えました。昨年は、本研究科西構改修工事等と重なったことから、  
30周年の記念式典を1年控らせ、本年、下記の通り記念行事を執り行うことといたしました。

2024(R6)年12月7日(土) 13:30-17:00  
会場／東北大大学内北キャンパス  
マルチメディア教育研究棟 6階大ホール  
オンライン／YouTube Liveで配信

13:30 記念式典開催時間  
14:30 特別記念講演  
「日本のGX(Green Transformation)を考える」  
末吉竹二郎先生（国連環境計画・金融イニシアチブ特別顧問）  
15:30 修了生記念トーク「国際文化研究科と私：過去・現在・未来」  
高橋洋先生（近畿大学准教授、2013年修了後就職修了：ローカル化政策）  
戸敷浩介先生（宮崎大学助教、2009年修了後就職修了：山形大学西久保講師）  
吳蘭先生（山形大学講師、2013年修了後就職修了：首善ヨルニアーチン講師）  
モデルデータ（新潟県立河東環境研究促進センター・若谷謙司）（多文化共生講師）  
16:40 ピアオレーティング

参加ご希望の方は事前の登録をお願いします。  
URL: <https://forms.gle/V62SHKV5J3gx99nZA>

会場への登録料：会場60名となっております。  
登録料にご登録された方のみ入室につきましては、オンラインでの参加となりますので、  
あらかじめご了承ください。  
なお、本記念式典はすべて日本語で執り行われます。

問い合わせ先：国際文化研究科企画企画係 int-scm@grp.tohoku.ac.jp

GSICS  
TOHOKU UNIVERSITY



左から：杉本亜砂子理事、劉庭秀副研究科長（当時）、江藤裕之研究科長（当時）、富永悌二総長、滝澤博胤理事



式典開催に携わった研究科スタッフ

# 研究プロジェクト

## 聖徳太子と忍者： 歴史とポップカルチャーをつなぐ物語

日本宗教・思想史研究講座  
准教授 オリオン・クラウタウ

私の関心は学部時代から一貫して、宗教思想史における「物語の発明」にある。例えば、古代から近代に至るまで、教祖など「偉人」とされる存在のイメージは時代ごとに再解釈され、ときに大胆に作り替えられてきた。その代表例が聖徳太子(574-622)である。仏教の保護者、十七条憲法の制定者として知られる太子は、中世には戦の神、近代には「日本のデモクラシーの先駆者」、さらに未来を予言するノストラダムス的存在としても語られてきた。

このように日本史の教科書で誰もが知る聖徳太子であるが、実は「忍術の祖」とも語られてきたことはあまり知られていない。もちろん史実の裏付けは存在しない。しかし戦後日本で広がったこの奇妙な説は、観光振興や子ども向け娯楽にとどまらず、アメリカの武道文化にまで波及し、世界的な“忍者神話”的存在として定着していったのである。

昨年刊行した拙著『隠された聖徳太子』(筑摩書房)では、太子にまつわる多くの奇妙な物語の系譜を追跡したが、近年はそこで扱えなかった「忍術の祖」としての太子像がいかに生まれ、どのように国境を越えて広がっていったのかを探究している。その発端となったのは、自称「最後の忍者」藤田西湖(1899-1966)や観光プロデューサー奥瀬平七郎(1911-1997)の言説である。彼らは、中世以来の軍神信仰に

連なる太子像を背景としつつ、江戸後期に作成された巻物を踏まえ、それをさらに装飾し、太子が中国の兵法書『孫子』を取り入れて初めて「忍び」を用いたと語った。この物語は百科事典の記事や「忍者検定」の公式問題にまで採用され、やがて「常識」として定着していくこととなる。

興味深いのは、この“忍者太子”像が日本にとどまらず海外にも輸出された点である。ジャーナリストのアンドリュー・アダムズが英語圏に紹介し、ジャン=クロード・ヴァン・ダムが主演した1988年映画『ブラッド・スポーツ』の主人公のモデルとなったアメリカの武道家フランク・デューカスも、自身の流派を太子にさかのぼるものとして位置付けている。そして極めつけは、同じ1988年の特撮テレビ番組『世界忍者戦ジライヤ』である。ここでは聖徳太子が「世紀の秘宝・パコ」を守るために忍者を組織し、さらには巨大ロボットまで創造したと描かれた。まさに歴史・伝承・観光・娯楽が融合した壮大な物語である。

以上のように、聖徳太子は何度も「発明」され、再解釈されてきた存在である。もはや過去の単なる偉人にとどまらず、忍者というグローバル文化をつなぐ象徴的な存在へと変貌した。その軌跡は、歴史がいかに現在の想像力と結びつき、世界を動かす文化資源となるのかを雄弁に物語っているのである。



## ■ シャリーアと近代研究会

アジア・アフリカ研究講座  
教授 大河原 知樹

本研究会は、シャリーア（イスラーム法）の現代社会における位置づけを解明すべく、2008年6月の設立以来17年にわたって続けられています。今でこそ、国際法のスタンダードは近代西洋法ですが、グローバル化以前には、それぞれの地域で独自の法システムが運用されていました。中でもシャリーアが通用していた地域は、中東のみならず中央アジア、南アジア、東南アジアまでの広い範囲におよんでいました。

本研究会は、現代の中東諸国などの法制度においてシャリーアがどのように機能しているかを検証していますが、基本的な活動は、オスマン帝国が1860～70年代に制定した「民法」であるメジェッレ法典（以下、M法典）の研究です。この時期のオスマン帝国は、商法や刑法など、近代西洋法をモデルとした法を多数制定していますが、その中で、M法典は数少ないシャリーア準拠の法律です。

本研究会は、M法典の原典であるオスマン・トルコ語およびアラビア語訳の条文および注釈書を基に英語、フランス語、ブルガリア語、ヘブライ語、ボスニア語、ロシア語などの各国語訳を併せて研究し、現代の中東諸国ほかの法にいかなる影響を及ぼしたかを考察しています。

本研究会には、シャリーア、日本民法、比較法、歴史学、地域研究などを専門とする研究者に加えて、弁護士が参加していることも大きな特徴です。弁護士たちとの共同研究の成果として、2023年に『エジプト民法典』（第一法規）が出版されています。

国際共同研究としては、ドイツ、レバノン、ボスニア・ヘルツェゴビナからの研究者招聘、トルコの司法省主催の国際シンポジウムにおける招待講演、成果論集の刊行などがあげられます。現在は、M法典の日本語訳刊行に向けた詰めの作業をおこなっているところです。



トルコで開催された国際メジェッレ・シンポジウムにおいて  
招待発表した際の集合写真（トルコ、ブルサ：2017年9月）



メフメド・ベチッチ氏（サラエボ大学法学部准教授）  
特別講演会の集合写真（東洋文庫：2025年9月）



## 新任教員紹介



応用言語研究講座

准教授

常本 亜希

2025年4月より応用言語研究講座に着任いたしました、常本亜希(つねもと あき)と申します。専門は応用言語学・英語教育学で、特に外国語のスピーキング・リスニングの指導や評価に興味があります。北海道旭川に生まれ、札幌で育ちました。初めての東北暮らしですが、仙台は故郷に似ていて、とても落ち着くなど感じています。中学・高校で英語を教えるなかで、外国語の発音評価やスピーキング指導に興味を持ち、専門的に学びたいと考えるようになり、イギリス(University College London)、カナダ(Concordia University)に留学後、関西大学での勤務を経て、本学に着任いたしました。

外国語でのやりとりのなかで、「これって発音のせい…？」と思ったことはあるでしょうか。例えば英語がうまく通じなかったとき、あるいは自分が聞き手の立場で、空港や電車のアナウンスを聞いたり、英語で映画を見たときに「発音のせいで聞き取りづらいな」と思ったこともあるかもしれません。このように、日常のま

ざまな場面で、発音を原因とする「かもしれない」問題が起こることがあります。知っている単語のはずなのに、簡単に聞き取ることができない。その原因は発音だけなのでしょうか。そして、どのような発音であれば聞き取りやすいのでしょうか。

私の研究目的は、スピーチの聞き取りやすさに関わるさまざまな要因を探ることで、学習者や指導者がどのような要因に注目すれば、相手にとって聞き取りやすく話すことができるようになるかを検証することです。そして、コミュニケーションは話し手・聞き手、お互いの努力によって成り立つものなので、聞き手がどのような経験を積めば、相手のスピーチを苦労なく聞き取ることができるようになるかについても研究しています。国際文化研究科では、他講座・大学の先生がたと共同して学際的な研究を進めるとともに、研究成果を学習者や教員養成の場に還元し、効果的な指導・評価方法の開発につなげていきたいと考えています。



ヨーロッパ・アメリカ研究講座

講師

中津 匡哉

2025年4月にヨーロッパ・アメリカ研究講座の講師として着任した中津匡哉と申します。学生時代、学部はこちらの研究科と名前がとてもよく似た、神戸大学国際文化学部(現・国際人間科学部)を卒業しました。「国際」と名前が付いている通り、海外に行くことに憧れている学生が多かったのですが、私もご多分に漏れず2年生終了時に1年間の休学を申請し、フランス・リヨンに語学留学をしました。この経験があつたことで、卒業時には就職ではなく進学を決意、しかももう一度フランスに渡ることになりました。フランスでの修士課程はナント大学、博士課程はパリ第7大学(現・パリ・シテ大学)で学んだのですが、この時、今扱っている学問分野である歴史学、特に日仏交流史の面白さを発見することになります。

修土学生として入学したナント大学歴史学部では史料の大切さを教え込まれました。自身が研究している時代を生きた人間が書いた文書、つまり史料を読み、それを使って過去に起つた出来事や人々の考え方を理解

しようとします。この史料は普通、アーカイブ施設に保管されているのですが、私が使用した史料の多くはデジタル化がされていません。史料を閲覧するには保管されている施設に赴き、係員に読みたいものを伝えて保管庫から出してもらい、箱に入った大量の紙文書の中から自分が欲しい情報を探します。DXやタイパといった言葉が呼ばれている昨今、この作業はそれらの対極に位置することかもしれません、それはそれで楽しさがあります。情緒的ではありますが、パソコンやスマートフォンの画面で見るよりも、紙に書かれた文字を読む方が、昔を生きた人間のそのままの声を読み取れるような気がします。

生まれも育ちも関西なので、正直、東北・仙台にはあまりなじみがありません。私に言わせると、違った文化の中に入り込んできました。史料を探し出すのと同じように、自分の足を使い、目で見て、話をみて、その文化を理解しようと現在奮闘の最中です。

## 受賞報告

○アジア・アフリカ研究講座博士前期課程の謝捷さんが勤労青少年躍進会理事長賞を受賞しました

○共同通信社から松本講師がアメリカ副大統領候補者討論会の取材を受けました

○アジア・アフリカ研究講座博士後期課程の王霄漢さんが日本賢人会議所記念論文で優秀賞を受賞しました

○アジア・アフリカ研究講座博士後期課程の鄧朝陽さんが、一般財団法人京都国際文化協会のエッセイコンテスト《私の国の文化》で優秀賞を受賞しました

○アジア・アフリカ研究講座博士後期課程の劉偉婷さんが日中関係学会第13回宮本賞の最優秀論文賞を、鄧朝陽さんが特別賞を受賞しました

○アジア・アフリカ研究講座の范文瓊さんが、第5回フルオブブックス文学賞のエッセイ部門に入選しました

○アジア・アフリカ研究講座の何琦璠さん張芊芊さんが、留学生論文コンクール2024で銅賞と奨励賞を受賞しました

○劉庭秀教授のインタビュー記事が韓国のThe Monday Timesに掲載されました

○東北大大学院国際文化研究科 言語総合科学コース(IGPLS)所属の Hristina Petrovikj さんが、2024年度 日本言語科学会(JSLS)国際大会において、優秀論文賞を受賞いたしました

○アジア・アフリカ研究講座の何琦璠さんの投稿論文が留学生新聞2025年5月15日(第18面)に掲載されました

○アジア・アフリカ研究講座の何琦璠さんが提案した研究計画が、公益財団法人 三島海雲記念財団2025年度学術研究奨励金に採択されました

○東松島市の小学校で実施されたSDGs教育(出前授業)の様子が東北放送で紹介されました

○東松島市の小学校で実施されたSDGs教育(出前授業)の様子がミヤギテレビで紹介されました

○東松島市の小学校で実施されたSDGs教育(出前授業)の様子が河北新報で紹介されました

○公益財団法人 北野生涯教育振興会の懸賞論文「第47回 事実に基づく小論文・エッセー」で、アジア・アフリカ研究講座博士後期課程の謝捷さんが第2席に入選しました

○第35回永井隆平和賞でアジア・アフリカ研究講座の何琦璠さんが優秀賞を受賞しました

○Kim Hyoungsun (IGPLS) さんが ICON 2025 にて Best Presentation Award を受賞しました



## 退職教員からの言葉

言語科学研究講座

教授

上原 聰

### 研究科での日々

滞米生活10年の後、1997年に東北大学留学生センター（現高度教養教育・学生支援機構）に着任、翌年本研究科の兼任となった。以来、今年3月に定年で退職するまで、それぞれ日本語教育と、言語教育に資する言語学の研究・教育という、自身の望んでいた両方に携わることができた。そのことを感謝の意を込めて振り返りたい。

所属講座は、研究科自体の再編成などもあり言語科学研究は3講座目であったが、総じてよき同僚に恵まれ、研究・教育また学生指導も良い形でできたのではないかと思う。以前講座経費配分が少なかった時代には講座教員が各個人研究費から出し合い、不足していた院生室の備品を購入したこともあった。ある講座が消滅の危機にあった時期には、私の本務先に声をかけ計4名が研究科教授陣に加わることとなった。

自身の専門が認知言語学と言語類型論であることから、2002年に開始した、現在の「附属言語脳認知総合科学研究センター」の土台となった21世紀COEプログラム「言語・認知総合科学戦略研究教育拠点」には当初からメンバーとして関わった。自身の共同研究者と

の繋がりからタイ国チュラロンコーン大学にて同大学と東北大学の言語学共同シンポジウムが開催でき、両大学教員同士の国際研究交流ができたのも懐かしく思い出される。

研究科に国際大学院言語総合科学プログラムが創設されてからはそのカリキュラムの科目を担当し、また、研究科も参画する東北大学日本学国際共同大学院が設置されてからはそのプログラムにも授業を提供してきた。

受け入れ指導した学生にも恵まれた。留学生が多く、また振り返って見ると、出身地別で中国・韓国・台湾のほか、タイ、ベトナム、フィリピン、インド、インドネシア、イラン、ブラジル、英国、NZ、豪州など、多様な国地域にわたった。留学生の多い研究科の中でもより多様性の見られる研究室となっていたと思う。勤勉・優秀な学生が多く、私も指導・共同研究する中で自身の研究にも資する多くの示唆を得ることができた。修了生たちには国内外の大学等で日本語・外国語教育の職に就いたものなど多く、その活躍を嬉しく耳にしている。今後も、研究科で得た知識と経験を活かした国際交流の場での活躍と、多文化共生の推進を期待したい。

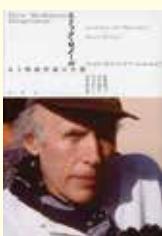


## 新刊紹介

### エリック・ロメール——ある映画作家の生涯

アントワーヌ・ド・ベック、ノエル・エルブ著

(坂巻康司・寺本成彦・寺本弘子・永田道弘訳、水声社、2024年)



本書はフランスを代表する映画史家として著名なアントワーヌ・ド・ベック（高等師範学校教授）が若い協力者と共に執筆した評伝である。2014年に刊行された原著は著者による「ヌーヴェル・ヴァーグ」の映画作家の評伝としては、トリュフォー、ゴダールに続く三冊目。訳書は註も含めて754頁に達しており、これまで以上に浩瀚な書籍となった。エリック・ロメール（1920—2010）といえば幾つかの伝説的な事柄以外は私生活がほとんど知られぬ人物であったが、本書においてはその生涯が余すところなく描き出される。すなわち、第二次世界大戦下を郷里で過ごした青年時代。高校教師でありながら批評家として頭角を現す1960年代。映画作家として話題作を量産する壮年期。そして新たな分野への関心を持ち続けた老年期が、膨大な資料を基に鮮やかに示される。本書は、フランス映画の愛好家はもちろんのこと、20世紀ヨーロッパの歴史・文化全般に関心を持つ読者をも満足させる筈だ。

### 柳宗悦とウィリアム・モリス

### ——工藝論にみる宗教観と自然観

(島貴悟著(東北大学出版会、2024年)



本書は、大正期から戦後にかけて日本で行われた民藝運動と、19世紀末のイギリスで起ったアーツ・アンド・クラフツ運動の関係について、それぞれの運動の中心となった柳宗悦（1889年-1961年）とウィリアム・モリス（1834年-1896年）の思想を軸に考察したもので、二つの運動はいずれも、近代化のなかで失われていった工藝文化を再評価し、その復興と改良を目指した点で共通していますが、柳とモリスの思想は、単なる審美的次元にとどまらず、工藝への関心を起点として、近代的価値観を徹底的に問い合わせるものでした。本書では、両者の工藝論の背後に、いかなる宗教観と自然観が控えていたのかを明らかにすることを通じて、その共通性と差異を整理することを試みました。2025年は、柳が陶芸家の濱田庄司、河井寛次郎とともに「民藝」（民衆的工藝の略）という言葉を造ってからちょうど100年目にあたります。関連する展覧会などで興味を持たれた方は、ぜひ本の中身を覗いてみていただければ幸いです。



## 修了者からのメッセージ



ヨーロッパ・アメリカ研究講座  
2025年3月  
博士後期課程修了

阿部 純

### 様々な経験と感謝

2024年度に国際文化研究科の博士後期課程を修了し、現在は石巻専修大学の助教として働いています。まずはご指導下さったヨーロッパ・アメリカ研究講座の小原豊志先生、寺本成彦先生、山内玲先生に感謝申し上げます。また多文化共生論講座の目黒志帆美先生、高度教養教育・学生支援機構の竹林修一先生にも大変お世話になりました。

大学院時代には積極的に「外」へ出ること、そして様々な経験を積むことに重点を置きました。その結果、2020年2月に名古屋大学で開催されたHistorians' Workshop 10th Research Showcaseではベストスピーカー賞を頂き、同年5月にはアメリカ史研究で最も権威のあるOrganization of American Historiansで発表することができました。

また、東北大学国際文化研究会の代表を務め、2020年2月にはニュースウイーク日本版の小暮聰子記者を招き、「戦争の記憶」をテーマとしたシンポジウムを開催しました。さらに読書会、研究発表会、公開講演も企画・開催しまし

た。研究会のアドバイザーを長年務めて下さった東北大学名誉教授の小林文生先生には大変感謝しております。研究会と一緒に運営した亀山光明さん、増渕佑亮さんは、今も切磋琢磨し合える大切な友人・研究仲間です。

なお私はハワイ大学マノア校への交換留学を予定していましたが、新型コロナ感染症の拡大により交換留学が中止となってしまいました。しかしハワイ大学マノア校教授である吉原真里先生のお力添えのおかげで、訪問研究員として留学することができました。自分の専門であるアメリカ史研究の「本場」で学んだ経験は、何事にも代え難い人生の「財産」になっています。

博士論文の完成までの道のりは険しいものでしたが、貴重な経験を得ながら、充実した大学院生活を送ることができました。支えて下さった方々への感謝を忘れず、教育と研究を通じて恩返しをしていく所存です。



言語科学研究講座  
2025年3月  
博士後期課程修了

グエン・ティー・  
テウ・フエン

### ご縁に支えられて広がる学び

はじめまして。私は2025年3月に国際文化研究科言語科学研究講座を修了し、博士号を取得しましたグエン・ティー・トゥー・フエンと申します。博士後期課程としての3年間は決して長い期間ではありませんでしたが、得た学びや経験、そして何よりも多くの方々との出会いは、私の人生におけるかけがえのない財産となりました。

入学当初はコロナ禍の影響で授業がオンラインとなり、新入生向けのオリエンテーションも中止されました。他大学からの進学であったため、周囲に知り合いはほとんどおらず不安もありましたが、ゼミや共同研究室で仲間と出会い、すぐに温かい学びの環境に溶け込むことができました。仙台での生活の中では、研究や日常の喜びを分かち合い、困難に直面したときには支え合える友人を得ました。修了して帰国した現在でも、仲間と連絡を取り合い励まし合える関係が続いていることを、とても嬉しく思っております。

研究テーマは「ベトナム語による漢文読解」という、言語科学研究講座の中でも特殊な分野でしたが、先生方からは常に丁寧なご指導と温かい励ましをいただきました。

研究を進めるためには複数回の現地調査や数多くの参考文献の購入が必要でしたが、博士学生フェローシップや学振特別研究員DC2に採用していただいたおかげで、研究を計画通りに遂行することができました。また、国内外の学会やシンポジウムに参加し、世界中の著名な研究者と交流する機会に恵まれたことは研究者としての成長に大きな影響を与えてくれました。

現在は、ベトナム・ハノイ国家大学外国语大学で講師として勤務し、国際文化研究科で培った知識や経験を教育と研究の場で活かそうと努めています。改めて振り返ると、先生方や職員の皆さま、そして共に学んだ仲間のおかげで学位を取得できたのだと強く感じています。そこで学びと出会いはまさに「ご縁」であり、今後も大切にしてまいります。

最後に、国際文化研究科で学んでいる在学生や、これから進学を目指す皆さまへ心からのエールをお送りします。どうか自分の道を信じて挑戦を続けてください。国際文化研究科は、その挑戦を全力で支えてくれる場です。皆さまのご活躍を心より応援しております。



## 2025年度科学研究費補助金採択一覧

氏名	課題番号名	研究種目	新・継	研究課題名	備考
Jeong Hyeonjeong	23K21946	基盤研究(B)	継	他者との相互作用を通した第二言語習得の神経基盤—口頭・筆記の共通性と特殊性—	
大河原 知樹	23K25445	基盤研究(B)	継	中東における協働・共有の法制と実態:組合と財産共有	
勝間田 弘	24K00223	基盤研究(B)	新	領土紛争の比較研究	
青木 俊明	25K01338	基盤研究(B)	新	Digital Native時代に求められる地方中核都市の中心市街地像:QOLからのアプローチ	
内原 卓海	24K00080	基盤研究(B)	新	偶発的語彙習得の神経基盤の解明:脳イメージングによる文脈類推学習効果の検証	
坂巻 康司	20K00489	基盤研究(C)	継	近現代フランス演劇における<祝祭>概念の総括的検討	
市川 真理子	21K00338	基盤研究(C)	継	近代初期イギリス演劇における基本的舞台道具の使用方法に関する総合的研究	名誉教授
山下 博司	22K00068	基盤研究(C)	継	マレー半島南半の複合社会における宗教の多元的共存と包摂的共生秩序の研究	名誉教授
勝山 稔	22K00287	基盤研究(C)	継	中国通俗小説受容の完全な体系化に向けた研究—民間翻訳の本格導入による多面的解析	
藤田 恵子	22K00460	基盤研究(C)	継	ディアスピラとしてのルーマニア・ドイツ語話者と文学—世界への拡散・孤立化・連帯—	名誉教授
妙木 忍	23K11671	基盤研究(C)	継	女性のライフコース選択を支えた地域社会の実証的研究—日本の芸者文化を事例として—	
佐藤 恒徳	23K00086	基盤研究(C)	継	クリスティアン・ウォルフ『第一哲学即ち存在論』の存在論の研究	GSICSフェロー
鈴木 美津子	23K00349	基盤研究(C)	継	ロマン主義時代の文学作品に見られるアメリカ表象	名誉教授
岡田 豊	23K00765	基盤研究(C)	継	翻訳支援ツールを活用した学術英語ライティング能力の段階別育成手法の研究と開発	名誉教授
高橋 大厚	24K03833	基盤研究(C)	新	節の省略の比較統語論研究	
小原 豊志	24K04298	基盤研究(C)	新	デモクラシーの「飼いならし」—初期アメリカにおける反ポピュリズムの言説構築と実践	
佐藤 透	24K03352	基盤研究(C)	新	心の一人称的特性と心身問題—間主観的構成論から見た心身の相関—	
中山 真里子	24K06615	基盤研究(C)	新	中日バイリンガル(Logographic Bilinguals)の心的辞書における音韻表象の解明	
朱 琳	24K04281	基盤研究(C)	新	清末民国初期の日本人居留民社会に関する総合的研究:北京・天津を中心として	
クラウタウ オリオン	24K03414	基盤研究(C)	新	憲法作者としての聖徳太子:その表象の思想史的研究	
ジスク マシュー	24K03860	基盤研究(C)	新	A Comparative Study of the Influence of Glossing on the Historical Development of Japanese and the Languages of Europe	
鈴木 道男	25K04008	基盤研究(C)	新	戦後東欧ディアスピラ文学の戦争表象と本国におけるその受容と摩擦—憎悪の受容史—	名誉教授

2025年10月24日現在

氏名	課題番号名	研究種目	新・継	研究課題名	備考
佐藤 正弘	25K05330	基盤研究(C)	新	大規模言語モデルに基づくマルチエージェント・システムを活用したイノベーション分析	
大窪 和明	25K07962	基盤研究(C)	新	人口減少に対応する分布的ロバスト二段階確率最適化を用いた事前復興計画モデルの開発	
劉 庭秀	25K15606	基盤研究(C)	新	東アジア・東南アジア地域における廃プラスチック問題の課題導出と国際比較分析	
矢島 真澄美	22K00129	基盤研究(C)	継	幕末・明治フェリーチェ・ペアトの写真に見る芸術論と新解釈	GSICSフェロー
Goto Corinna V.	24K04027	基盤研究(C)	継	Analyzing and Categorizing Manga and Children's Books for Extensive Reading in German	GSICSフェロー
Jeong Hyeonjeong	22K18464	挑戦的研究(萌芽)	継	外国語による感情処理神経メカニズムの解明—教室外の言語経験とfMRIの融合—	
メスロピヤン メリネ	21K13085	若手研究	継	Armenian Refugees in the Early 20th c. Japan: Mixed Methods Analysis	GSICSフェロー
繁田 真爾	22K12987	若手研究	継	「悪」の統治実践と人間観をめぐる近現代日本の思想史的研究—監獄教誨・死刑・宗教—	GSICSフェロー
真家 峻	24K16124	若手研究	新	認知神経科学アプローチからの外国語習得におけるスキル習得のメカニズムの解明	
繁田 真爾	25K16093	若手研究	新	「悪」の統治をめぐる近現代日本の比較思想史的研究—監獄・死刑・宗教教誨—	GSICSフェロー
Gong Liwei	25K16278	若手研究	新	The Grammaticalization of Shuo1 as a Complementizer in Standard Mandarin Chinese: Insights from a Large-Scale Podcast Corpus	学術研究員
小室 竜也	25K16344	若手研究	新	分野横断型アプローチによる英語冠詞の文法テストの妥当性検証	特別研究員
大澤 紗子	24K15910	若手研究	継	近代日本における女性の修養と模範的人物像に関する総合的研究	GSICSフェロー
常本 亜希	24K16144	若手研究	継	What Characterizes Comprehensible Speech for Japanese University Students Learning English?	
鈴木田 優衣	23K12237	若手研究	継	日本人英語学習者を対象としたスピーキング学習促進のための語彙の調査	GSICSフェロー
山下 博司	22KK0001	国際共同研究 加速基金(国際共同研究(B))	継	アジア多文化社会におけるエスニシティと宗教間宥和—日本の移民問題等も視野に	名誉教授
小室 竜也	25KJ0018	特別研究員 奨励費	新	脳イメージングを用いた言語的性と学習の相互作用の検討	特別研究員
木村 悠之介	25KJ0023	特別研究員 奨励費	新	近代日本における「宗教」としての神道と地域社会—メディア史の観点を中心に—	特別研究員
Flood Victoria Anne	25KJ0577	特別研究員 奨励費	新	第二言語談話理解における韻律と文脈統合の脳内メカニズムの解明	特別研究員
黒川 阜月	25KJ0607	特別研究員 奨励費	新	第二言語音韻表象が語彙の習得および知識表象に与える影響の解明	特別研究員
Huang Qiang	25KJ0635	特別研究員 奖励費	新	バイリンガルの文生成における構文は独立か共有か:fMRI研究	特別研究員



## キャリア講習会

## 公開講座

国際文化研究科では、毎年、本研究科を修了された先輩方にご自身の経験談をお話しいただいております。今年度は30周年記念行事の一環として、三名の修了生を講師にお招きし、令和6年12月7日に「修了生の思い出」をテーマに特別講演を開催しました。ご登壇いただいたのは、高橋梓さん（2013年博士後期課程修了・国際地域文化論専攻ヨーロッパ文化論講座、現・近畿大学法学部准教授）、戸敷浩介さん（2008年博士後期課程修了・国際文化交流論専攻科学技術交流論講座、現・宮崎大学地域資源創成学部教授）、そして吳蘭さん（2013年博士後期課程修了・国際文化交流論専攻言語コミュニケーション論講座、現・山形大学学士課程基盤教育院講師）でした。三名の先生方には、在学中の思い出や研究に取り組んだ際の試行錯誤、卒業後のキャリア形成の道のり、そして現在の教育・研究活動について、多彩なエピソードを交えて語っていただきました。それぞれ異なる分野・地域で活躍されているにもかかわらず、共通して研究への情熱と誠実な姿勢が伝わり、在籍する大学院生にとって大きな励みとなりました。講演を通じて、研究の道に進む上で直面する課題やその乗り越え方、そして研究者としてのやりがいや喜びが臨場感をもって示され、聴衆は深い感動を覚えたように思います。30周年という節目にふさわしい特別な講習会となり、参加者にとって今後の進路を考える上で大変貴重な機会となりました。三名の修了生の先生方の温かく力強いお話に、心より感謝申し上げます。非常に有意義なキャリア講習会であったと感じます。（鄭 嫣婷）



2024年11月2日に開催された公開講座は「国際関係における理念とその行方—アメリカの過去と現在から」をテーマに、アメリカの対外政策のあり方を歴史と現代の両面から議論しました。まず、多文化共生論講座の目黒志帆美が「野蛮な異教徒とアメリカ人—19世紀ハワイ王国におけるアメリカ人宣教師の言説」と題し、1820年にハワイへ渡ったアメリカ人宣教師の記録を手がかりに、その宣教戦略の特質を解説しました。続いて、国際政治経済論講座の松本明日香先生が「アメリカ大統領選挙と国際秩序観—ハリス陣営とトランプ陣営を比較して」をテーマに、目前に迫る大統領選挙に向けての両陣営の対外政策を論じました。前年度に続きオンラインでの開催となりましたが、質疑応答では活発な意見交換が行われました。大統領選挙への高い関心が寄せられるなか、過去と現在のアメリカの姿を通してその対外的姿勢を考える好機となったと思います。（目黒志帆美）

## 入試説明会

2025年6月6日18時から、国際文化研究科オンライン入試説明会が開催されました。申込者は40名で、当日参加したのは35名と、多くの参加がありました。当日は、まず入試実施委員長がスライドを用いて東北大および研究科の概要を紹介した後、今年度入試の内容について説明を行いました。その後、各講座から学生メンバーが参加し、研究内容や日常の指導体制について紹介するとともに、寄せられた質問に丁寧に回答しました。申込時には事前質問も多く寄せられており、これについては教務係を通じて書面で回答しました。当日の質疑応答では、入学後にどのように指導を受けられるのかといった具体的な内容が多く、そのほか応募時期や大学院生活に関する質問も目立ちました。いずれの質問も、研究科への関心の高さを示すものであり、今後の広報や情報提供の参考になると考えられます。最後に、説明会の準備と運営を支えてくださった教務係の方々、そして積極的に協力してくださった学生の皆さんに厚くお礼申し上げます。（鄭 嫣婷）

## 入学を希望される皆様へ

春季入学試験は  
**令和8(2026)年2月12日(木)、13日(金)**に行われます。

本研究科は、柔軟な思考力と広い視野および一定の語学力を有して、国際舞台で活躍できる創造的研究者または高度専門職業人になろうという明確な目的意識を持った学生を求めています。  
なお、上記の入学試験の詳細については、本研究科ホームページをご覧ください。

お問い合わせは、本研究科教務係において受け付けています。

## 連絡先

東北大大学院 国際文化研究科 教務係  
TEL: 022-795-7556  
E-mail:int-kkdk@gr.jp.tohoku.ac.jp